

『新奥州古戦物語』(黄表紙・安永五年刊)の翻刻と注釈

有働 裕

米山鼎岬作、鳥居清経画の黄表紙『新奥州古戦物語』(安永

五年刊)については、簡単な解説を付した翻刻を、『国語国文学報』第五十二集(平成五年三月)に、「鳥居清経画の草双紙(四)」として掲載した。しかし、あまりに遺漏が多く、何人かの先生方から厳しい御指摘・御批評をいただいた。本稿は、先の報告の粗雑を深く反省し、訂正を加えた翻刻に注釈を付して、改めて掲載するものである。

『補訂版国書総目録』によれば、本書には国立国会図書館本・西尾市立図書館岩瀬文庫本の二本が存するが、ここでは岩瀬文庫本を底本として写真版を掲載し、翻刻にあたっては国会本を適宜参照した。

書誌については、先の報告にも記したので、簡略に述べておく。

◇岩瀬文庫本(請求番号一〇二一六二)

①表紙・題簽 いずれも原のもの。

②柱刻 「こせん物かたり 上(中・下)」で、一〇十五了。

③紙数 十五丁。三卷合一冊。

④画作者 十五丁裏に「戲作 米山鼎岬述 鳥居清経画」。

⑤板元 題簽および一丁表・六丁表・十一丁表の屋標より鱗形屋。

⑥刊記・広告 なし。

◇国会図書館本(請求番号二〇八一二九二)

表紙・題簽が後のものである外は、岩瀬文庫本との異同はない。

翻刻不能の箇所は、で示し、不確かな箇所は傍線を付して示した。

翻刻にあたっては、適宜句読点や鈎括弧を補い、また、改行を施した。

翻刻および注釈中の引用部分の漢字表記については、できる限り現行の一般的なものに改めた。

本書は、宝暦十二年初演の浄瑠璃『奥州安達原』(竹田和泉、

近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛合作）を典拠としている。

注釈は、この『奥州安達原』との異同を中心に記したが、その際、浄瑠璃は『奥州』と略記することとした。また、本文の引用は日本名著全集の『浄瑠璃名作集』によった。

注釈を付すにあたっては、各種の辞書・事典類の外、特に左記の文献を参照した。

『陸奥話記』（群書類従 第二十輯）

『奥州後三年記』（同）

『清原系図』（統群書類従 第七輯）

『前太平記』（藤元元選著、板垣俊一校訂、叢書江戸文庫四 昭和六三年）

『辺境の争乱』（庄司浩著、教育社歴史新書五 昭和五二年）

『国立劇場上演資料集・一五一 奥州安達原』（国立劇場芸能調査室編 昭和五三年）

『浄瑠璃作品要説（3） 近松半二篇』（国立劇場芸能調査室編 昭和五九年）

『増補青年年表』（新群書類従 第七）

『黄表紙總覧 前編』（棚橋正博著、青裳堂 昭和六一年）

「板元と作者―草双紙を中心に」（鈴木俊幸著、『国文学解釈と鑑賞』平成六年八月号）

本稿を成すにあたり、資料の翻刻・写真版掲載を御許可下さった、西尾市立図書館岩瀬文庫の皆様には深謝申し上げます。

《上巻表紙》

※題簽の意匠は、安永五年に鱗形屋から出された他の黄表紙と一致する。（浜田義一郎編纂『黄表紙絵題簽集』参照）

《中卷表紙》

《下卷表紙》

《一丁表》

〔翻刻〕

ころはかう平十五年、ごしゆじやくのあんのぎやう、とうい
さだとう・むねとうぎやくをふるひ、くわんふたいぢなし給
ひしかども、さだとうがちやくし、たけひら・いへひら、てい
とをうかぶひければ、ぶしやうちんじゆふのせうぐん、八まん
太郎源のよしいへ公、うけたまわつてぎやくとをほろぼし、た
いちのせんちをかうむり給ふ。

されども、とつかのぎよけんふんじつのうへに、何もの共し
らず、たまきのみやをうばい奉れば、いくさだちがたく、いろ
くけいりやくをめくらし給ふ。

〔注釈〕

◇かう平十五年——『奥州』には、「時は康平五つの年」とあ
る。康平は一〇五八〜一〇六五で八年まで。康平五年（一〇六
二）は、源義家の父頼義が安倍氏を滅ぼした、前九年の役の厨
川柵の合戦があった年。『奥州』にならって「五年」とするべ
きところを単に書き誤っただけのようにも見えるが、本書が随
所で『奥州』とは設定を改め、後三年の役に関係した人物を登
場させていることを考えれば、意図的なものであったとも考え
られる。

◇ごしゆじやくのあんのぎやう——『奥州』では、「後朱雀院
の朝に当つて」。後朱雀院の在位は長元九年（一〇三六）〜寛

徳元年（一〇四四）。前九年の役のはじまりとされる、陸奥守藤原登任の安倍氏への攻撃は永承六年（一〇五一）で、後冷泉天皇の時。

◇とうい——東夷。「東夷狼りに逆威を振ひ」（『奥州』）。

◇さたとう・むねとう——胆沢・和賀・江刺・稗貫・紫波・岩手の六箇郡の司であった安倍頼良（頼時、？～一〇五七）の嫡男貞任（一〇一九～一〇六二）と三郎宗任（生没年未詳）。永承年中（一〇四六～一〇五三）に衣川関を越えて南に勢力を伸ばしたことが、前九年の役の原因となった。

◇くわんふ——官府。朝廷を指す。

◇たけひら・いへひら——清原武衡（？～一〇八七）は、前九年の役での戦功で従五位下鎮守府將軍となった清原武則の子であり、家衡の叔父。清原家衡（？～一〇八七）は武則の孫。

「さだとうがちやくし」は誤り。ただし、『清原系図』等、武衡と家衡とを兄弟とする誤記は他にも例がある。清原氏の嫡宗真衡と異母弟家衡・清衡との内紛が、後三年の役の原因となる。

『奥州』には、これら後三年の役に関する人物の記述はない。

◇とつかのぎよけんふんしつ——『奥州』にも「十握の御剣も今において行方知れず」とある。「十握の御剣」は三種の神器の一つ、草薙の剣の別称。「これによつて草薙の剣とは申すなり。この剣いまだ大蛇の尾の中に有りし程、簸川上に雲懸かりて、天さらに晴れざりしかば、天叢雲剣とも名付く。その尺わづかに十束なれば、また十束の剣とも名付けたり。天武天皇の

御宇、朱鳥元年にまた召されて、内裏に取められしよりこのかた、代々の天子の御宝なればとて、また宝剑とは申すなり。」

（『太平記』二五）

◇何もの共しらず、たまきのみやをうばひ奉れば——『奥州』第一、次「吉田神社の段」の、次のような展開がふまえられている。

帝の弟君環たまきの宮は、匣くわの内侍らの供を連れて、吉田神社へ忍んで花見にでかけた。そこへ現れた鳥差の突然の狼藉により騒ぎとなるが、その間に宮と匣の内侍は姿を消す。遅れて駆け付けた宮の御守役の兼仗直方は、宮を盗み出すようにとの匣の内侍あての頼み状を見つけ、大江維時のしわざかと疑う。

※『奥州』第一段冒頭を踏まえた場面。絵には、朝敵退治の宣辞を賜る八幡太郎源義家が右下に描かれ、その隣には執権鎌倉の権頭景成。壇上には大江のまさとらと着物に「匣」と記された人物。大江のまさとらは『奥州』には見えない名だが、大江維時に対応（p25の登場人物対照表参照）。着物に「匣」と記された人物は、『奥州』には登場しないが、大江匡房（一〇四一～一一一一）であろう。義家は匡房から兵法を学び、それによつて飛ぶ雁の列の乱れから伏兵を知って難を逃れた、という逸話による。この外、瓜割四郎糺が『奥州』のこの場面には登場するが、本書では省略されている。

《一丁裏二丁表》

〔翻刻〕

八まん太郎よしいへのみだい、しきたへ御ぜんは、けんじやうぜんじなをかたのそく女にておわせしが、なをかたは、たまきのみやのかしづぎにて、みやをばいとられ、日ぎりのせんぎにて、なんぎし給ひければ、内々にてはみまひのつかい、くしのはをひくがごとく、しつけんわだ左衛門のじやうためむね・いこまの介御ぜんへあいつめ、ため宗申けるは、「とのにはぎよけんとみやの御せんぎ、御いのりのためとして、つるがおか八まん宮へ御さんけい。いまだ御きくわんなぎところへ、みやこよりちよくしとして大江のまさとらまいるよし。いかゞはからい申べし。」

（敷妙）「さればいの、そなたよぎにはからい、御きくわんまで御ちそう申しやいの。」

（為宗）「さてまた御そばつとめのうりわり四郎、あくぎやくしたいにあいてうじ候が、とのには御そんじなきことは候まじ。」

（敷妙）「いやく、今あらだてゝは、かへつて御せんぎのじやま。あくぎやくのともがらと一みこそさいわい、よきせんぎのてがらと、とのもあふせられしぞや。」

〔注釈〕

◇しきたへ御ぜん——敷妙御前。義家の御台で直方の娘、という設定は『奥州』と同じ。

◇けんじょうぜんじなおかた——平兼仗直方。兼仗は鎮守府の役職の一つ。鎮守府には將軍一人、副將軍一人、軍監一人、軍曹二人が置かれ、その下に兼仗があつた。平直方は、平忠常の乱（長元元年・一〇二八）で追討使を任せられた武將。源頼義を婿とし、義家は外孫にあたる。

◇日ぎりのせんぎ——日切（日限）の詮議。「兼仗が郎等あわたぶしく、只今大江維時公より、宮の御詮議何故に遅なはる、日延の時刻も一日に迫る、尋ね出すか切腹あるか二つ一つの御返事あるべしとの御事なり。」（『奥州』第三、中「環宮明御殿の段」）

◇くしのはをひく——訪れる人が絶えないことを示す諺。「見物櫛の齒を挽く如く、あつばれ見事なる最後と」（西沢一風

『新色五卷書』卷二の五・元禄十一年）

◇しつけんわだ左衛門のしやうためむね——『奥州』には登場しない武將。「奥州攻」の世界の役名。

◇いこまの介——志賀崎生駒之助英。義家の近習。

◇うりわり四郎——瓜割四郎。義家の家来であるが、実は大江維時の手下。十四丁裏十五丁表の注釈参照。「大江維時打紐したる白木の箱、雑掌笠原軍記に持たせ、傍見回し声（よりに）をひそめ、（中略）この上は義家一人。彼が家来瓜割四郎我が味方に付けたれば、十が九つ大望成就。」（『奥州』第一、切）

※環の宮を何者かに奪われ、御守役の直方はその責任を問われる。直方の娘である敷妙御前のもとへ、心配した源家の侍達が

見舞う、という場面であるが、『奥州』にはない。また、敷妙御前も事態を楽観的にとらえて落ち着いているように描かれているが、『奥州』での描かれ方はかなり異なっている。気丈ながらも、大江維時の悪計に翻弄される女性という印象が強い。

さと打薫る、絹の香は、義家の奥方敷妙御前、襦袢姿もしとやかに、「維時公には御苦勞の御出で。（中略）御用の品もあらば私に」と。聞いて維時意義繕ひ、「ヤ義家の御内證此頃は打絶え申した。其許の親父直方には、御預かりの環の宮行方なく、老人の心遣い、そこにも親の事なれば無案し召されう。それは格別、某けふ罷越す事別儀ならず。義家には近々東国へ進発。門出を祝はん為、維時が寸志の音物、改めて受納あれ。」と件の太刀箱さし置けば、「これは、何から何まで御親切の御詞、殊に夫が門出を御祝ひとは、義家にも無悦び。」と、蓋押し明くればこはいかに切柄したる新刀の刀。恠りさすかは武將の妻、さあらぬ体に取上げて、「武士の門出に打物とは、御心の付きし御音物。さりながら、これは正しく科人を試す不祥の刀。」といふを抑て、「コレサ敷妙、心を箠めし我が音物、婦人が聞いて何を判断。義家に見すれば胸に覚えのある事さ。とつくりと思案をして、其刀の返答を相待つと、某が申すといはれよ、奥方」と、割つて言はざる切柄は、いかさま子細あら身の刀。鞘にしつくり納めても、心のときつき納まらぬ。（第一、口）

《二丁裏三丁表》

〔翻刻〕

ぜんをこのむものはおのれを□にしてよくひとをせし□ あくをこのむものはわれをおもふにてわかまをうしなふ

好善者[□]直人[□]能不能[□]、好悪者我似思我身失と、いへり。

ちよくし大江のまさとらは、「さきだつてみつるぎふんじつ、その上たまきの宮ゆくへしれず。そのせんぎ、くさをわつてせんぎすべきところ、いつまでへらりくくとせんぎのさたもなくうちすておかるゝや。ぶせうのしんていいぶかし。そのへんとううけ給はらん。」とのべける。

(義家) 「なるほど御ふしん御もつとも。此二品せんきうちすておくは、すなわち、くさをわつてのせんぎなり。とをからずしてせんぎしだし、おめにかけん。此二品いでさせ給はぬうちは、ねいじんばらもあいくわをすべし。いてさせ給へば、ねい人のじやくめついらくとおほしめせ。」と、まさとらをしりめにかけてのたまへば、まさとらもそこきみわるく、「いちゑんそんなことは、ぐあんにおちぬ事でござる。」

(義家) 「いや、きんていのうち、ぎやくとのみかたのともがらなくて、此二しなゆきがたなくならせ給ふはずはなし。たとへいづかたへわたらせ給ふとも、よしいへ、まなこのくろきうちは、とをからずせんぎしだし申さん。」とのたまへば、

(まさとら) 「いや、よしいへどの御ちそう、さてくいかい御ぞうさでござつた。おこゝろづかいせんばんく。さて、四方のたきすいと申すをはじめてたべ、ことのほかたべよひました。いやはや何を申たか。たわいく、おいとま申ませう。」

〔注釈〕

◇好善者已直人能不能□、好悪者我似思我身失——未詳。
 ◇くさをわつてのせんぎ——草を分つての詮議。草の根を分けての捜索。「からめ捕らんとこの程より、草を分けて詮議いたせど、いつかうに行方知れず。」（『三人吉三廓初買』第二番目三幕目）

◇いちゑん——一円。全然、全く。

◇ぐあんにおちぬ——愚案に落ちぬ。納得出来ない、の意。

◇きんてい——禁廷。宮中、御所。

◇四方のたきすい——神田和泉町の酒店四方久兵衛の銘酒「滝水」のこと。「四方が仕似せの沃泉水には、美濃の孝子も荷囊をたたく」（『根無草後編』巻四・明和六年）

◇たわい／＼——酒に酔った上でのざれごと、たわいのない発言。「酩酊を酒たはひと云」（『俚言集覽』）

※大江まさとらに責められた義家が逆に言い返す場面であるが、ここも、『奥州』には対応する場面がない。ここでの大江まさとらの発言と類似したものは、『奥州』では、維時ではなく桂中納言教氏にみられる。

天下の武将義家に桂中納言教氏が、三ヶ条の不審あり。まづ第一には、三種の神器の一つ十握の御剣、先年より紛失し御行方知れさせ給はず。禁門の外は武将の守る所。天照神より伝はりし御宝、草を分け地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮、御行方まします。これなんど

は朝廷の御大事。察する処都間近く反逆謀反の族が所為と、鏡にかけて頭はれたり。さすれば奪はれし直方は御辺が舅と聞き及ぶ。縁に引かれてゆるかせに差置くなど世の人口は塞がれまじ。此三つの返答、聞かまほし。（第一、切）

《主要登場人物対照表》

| | |
|------------|--------------|
| 奥州安達原 | 奥州古戦物語 |
| 源義家 | 八まん太郎源よしへ公 |
| 大江維時 | 大江まさとら |
| 平兼仗直方 | けんじやうぜんじなおかた |
| 敷妙（義家妻） | しきたへ御前 |
| 浜夕（直方妻） | はまゆふ |
| 袖萩 | おそで |
| 生駒之助 | いこまの介 |
| 恋絹 | 恋ぎぬ |
| 教氏実（安倍貞任） | 教氏実（清原）たけひら |
| 南兵衛実（安倍宗任） | 南兵衛実（清原）いへひら |
| 善知鳥文治安方 | うとう文治 |
| 岩手（安倍頼時妻） | いわせ（安倍貞任妻） |

《三丁裏四丁表》

〔翻刻〕

おのれがわらわつ、まんとほつ、すまは、つみなまめちつみしてのよしませまほ
巳邪智欲レ包則 無罪者罪而覆其罪

下^かしんうりはり四郎、いこまの介になわをかけ、けいせいこひぎぬ引たて、御せんにいで、「このいこまの介ぎ、けいせいめにくさりつき、みたちへ引こみ候ふぎものゆへ、りやう人共になはうつて候。」と、てがらじまんにあいのぶる。

よしいへきこしめし、「しおきはわがむねにあり。いこまの介より大それたふぎものが、ほかに一人ある。これをまづさきへしまはねはならぬ。けいせいぐるひはふぎではない。しゆじんの女ほうに心をかけるやつこそ、これ、ふぎもく、上なきふぎ。」

(四郎)「あゝそれはきつい。大のきまり大あたりでござりませす。」と、わがみのうへと、さゝれてこそくく。

このたび、きんていにて大しやおこなわれ給ふにつき、八まん太郎ちよくをかうむり、おうしう一こくのる人御めんこれある。然はせん年ちよつかんをかうむるかつら中納言のりくに御めんくわんのところに、のりくにびようししければ、一子のりうちをぞめしかへし給ふ。

(義家)「これまでこそしまもりなれ、さすがのりくにの御子そく。さあくせうぞくあらためられ、これよりかつら中納言のりうちとなられよ。」と、しやうぞくあらため、大たちさ

してかへらるゝ。

〔注釈〕

◇けいせいこひぎぬ——『奥州』では、九條の遊里、文字屋の傾城、恋絹。実は、安倍頼時の娘で貞任宗任の妹、という設定になっており、そのことは第一段で語られるが、本書では十三丁表まで記されない。「参下向もおほき中、人目にそれと柄襦は、九條の里の恋絹とて、廓に名ある全盛の、松の位の大夫職。二世と兼ねたる恋中の、生駒之助に添いたやと、歩み運ぶぞ殊勝なり。」（第一、次）生駒之助を思うあまり、瓜割四郎らの悪計にはまり、廓を抜け出して義家の館まで来たところを、生駒之助ともども捕らえられてしまう。「サアイナ、其訳といふは、客は誰か知らねども、わしに合点もさせず身請の相談。親方がいに手附けまで受取つたと、聞くとばつたりコレ（病）の病、どうかかかると案じる折から、駈落してこいとお前の知らせ。ヤア／＼／＼そりや誰が。四郎様が。ヤア何あの瓜割四郎がさう言うたを、誠と申うてスリヤそちは廓を。アイ、駈落してきたわいな。」（第一、口）

※この場面、瓜割四郎が義家に生駒之助・恋絹の処罰を求めているが、『奥州』では、笠原軍記に二人を引っ立てさせた維時が詰め寄っている。軍記は、維時が敷妙に渡せと命じた恋文を所持しており、それを見抜いた義家は軍記を切り捨て、次のように言う。「サレバ此奴大不義者。御覧なされあらう事か、女

房敷妙に斯様の艶書、傾城狂ひは時の興、強ち不義とも申されず。主ある女に不義しかけるは、畜生と申さうか。成敗したが誤りか。科の吟味立てすると、どこへ飛沫がかゝらうやら。それとともに御不審あらば、承らん」（第一、切）三丁裏の「けいせいぐるひはふぎではない」云々は、この詞章をふまえたものと思われる。

◇たいしやおこなはれ——中宮の出産にともなう大赦。「中宮御産の御祈り、此度の大赦に就き奥州の流人、桂の中納言則国召返すべしとの勅諭。」（『奥州』第一、大序）

◇かつら中納言のりうち——桂中納言教氏。桂中納言則国の子。勅諭を受けた父とともに奥州に流されていたが、大赦によって、父に代わり許され、官位を授かる。『奥州』では、装束をあらためた途端に尊大な態度を取り、義家責める。（二丁裏三丁表の注釈参照）奥州に配流されていたという藤原教氏がモデルであろう。藤原説貞の息女と恋仲であり、その息女に安倍貞任が横恋慕したとの説話がある（『前太平記』）。

◇しまもり——島守。島の番人、あるいは、島で寂しく暮らす者。「海人の苦屋の煙と俱に、父は空しく相果てて、生きたるかひも荒磯の島守にて朽ちなん身の、召し返さるゝは大君の御恵み。」（『奥州』第一、切）

◇大たちさして——大太刀差して、か。あるいは、大内指して、の誤りか。「袂も匂ふ初冠、大内指して帰らるる。」（『奥州』第一、切）

《四丁裏五丁表》

うりわり四郎、かねてけいせい恋ぎぬにこゝろをかけしところ、いこまの介とふかくなじみ、くるわをおちていこまの介をたづねきたりければ、うりわり大きにいかりて、二人をふぎものといひたてけれども、大せう、けいせいくるいはふぎにあらず、されどもゆふ女をやしきへ引こみ、さほうをやぶりしものなれば、かんどうし給ひて、あふせけるは、「これよりおうしうへ下り、かのせんぎの事てがらもできしなば、これをかうにかんどうゆるすべし。そのけいせいとふうふになつて、ともにせんきし出すべし。はやくく。」とあふせをちかふ□。いでゆくむかふへ、四郎がおとゝうりわりぐん次、てのもの引ぐし、「さあ、そのこひきぬをこつちへわたせ。」とかけければ、さしぞへわたし、ふうふにてきりまくれば、みなちりくんにげゆきける。

いこまの介はいつくまでもとおちていく。

(生駒之助)「このすべたやろう。のらかぶんとして、此いこまにてむかい、すいさん也。」

(手下)「うぬらがはたらいても、なんともおもやせねど、まづにげませう。」

〔注釈〕

◇うりわり四郎、かねてけいせい恋ぎぬにこゝろをかけしところ——『奥州』には、次のように記されている。「続いて立

つ恋絹を、四郎が止めて、コレ恋主、エムわれはく、首だけ惚れている四郎、振つてくふり付け、生駒にばかりきつい乗り様、胴欲ぢやぞよ。エム爰な命取め、としがみ付く。」

(第一、次)

◇くるわをおちていこまの介をたづねきたりければ——三丁裏注釈参照。

◇これよりおうしうへくだり——以下の義家の言葉は、『奥州』の詞章に対応。「ヤア犬死せんとは狼狽者。追放の身に入らざる武士達。最前一問より立聞けば、其女は貞任がナ。定めて遠い国の者、馴れなじみしこそ幸い、夫婦となつて随分添ひとげ、彼の本国へ立退かば究竟の手がかり。心得たるか。環の宮の行方が知れねば、倅直方は大罪人。時宜に依つては敷妙が、縁の切目とならうも知れぬ。添ひとげるも義理。添はれぬも、浮世の義理と諦めよ」(第一、切)

◇四郎がおとゝうりわりぐん次——『奥州』には登場しない人物。『奥州』では、生駒之介と恋衣とを連れて来て義家に切られるのは笠原軍記であり、この場面で二人を襲うのは、軍記の弟の軍六。本書では、軍記の役割をも瓜割四郎が兼ねているので、その弟「ぐん次」を笠原軍六の代わりに登場させている。

◇さしぞへわたし——生駒之介が差添(脇差)を恋絹に渡して。二人での立ち回りが『奥州』でも見せ場となっている。「かゝる所へ笠原が弟同名軍六、兄の敵通さじと、大勢引具し追取りまく。それと生駒が、コリヤく、恋絹、これで防げ、と一腰を、

しやんと柳の腰車、石げさ肩げさまくり切り、逃ぐるをやらじと女夫は白刃、奥庭深く追うて行く」(第一、切)

◇すべたやろう——つまらぬ者の意。相手をのしって言う語。

「ちやまがやろうめ。こりやめくりでもおしへてやろうか、このすべたやろうめ」(富川吟雪・青本『運附太郎左衛門』安永元年)

◇のら——放蕩者。怠け者。「のんこに髪結うて、のららしい達衆自慢といひそな男」(『心中天の網島』・享保五年)

宝暦～安永年間の『奥州安達原』歌舞伎での上演の配役

| | 義家 | 貞任・教氏 | 宗任・南兵衛 | 文治 | 直方 |
|--------------|-----|-------|--------|-------|------|
| 宝暦13年 森田座 | 仲蔵 | 澤村喜十郎 | 中村助五郎 | 坂東三八 | 辰十郎 |
| 明和2年 内野座 | 九十郎 | 今五郎 | 惣蔵 | 沢村染五郎 | |
| 明和6年 森田座 | 染五郎 | 佐十郎 | 広右衛門 | 半五郎 | 辰十郎 |
| 安永4年 中村座 | 仲蔵 | 団蔵 | 助五郎 | 広次 | 勘左衛門 |
| 安永6年 森田座 | 八百蔵 | 団十郎 | 半五郎 | 八百蔵 | 広右衛門 |

《五丁裏》

〔翻刻〕

恋きぬは、おつとのあとをしたひ、へいをこしておいつかんとすれども、あしがよりなければ、わきざしをへいへつきたて、つかをあししろにせんと、へいのきわにたちよりける。おりふし、軍次はやうすをうかどはんと、へいのそとへよりかゝりいる共しらず、こひきぬは、わきざしぐすとへいへつきこめば、ぐん次がどうばらつきぬかれ、のたうちまわつてしゝてげり。生駒の介は立かへり、「やあこひきぬかてがらく。御二しなのせんぎ、かどいでよし。」と、ふうふもろとも、おうしうさしてぞ下りける。

(軍次)「あいたくく。なむさん、してやられた。あゝしんだく。」

〔注釈〕

※『奥州』第一、切による場面。「宵闇に外面を窺ふ等原軍六、(中略)堀に身をよせ耳を寄せ、窺ふ内には恋絹が、多勢を切抜けそこかしこ。是を足場にあの堀と、差したる刀抜放し、突込む切先軍六が、胸腹思はず芋串に、のた打回る鰻武士、内にはそれとも白壁に柄の足代、堀の上、ひらりと飛びたる折こそあれ、多勢難立て生駒之助、女房出かした、維時が家来軍六を手にかけしは、忠義の門出手始めよしサア恋絹と突立つ」

《六丁表》

〔翻刻〕

なみうちきわによりあつまる、かづきのあまが、ひるやすみ。
(海女) 「これ、きかしやつたか。けふおだいくわんさまからおふれのあつたは、このうらきんじよに八まん太郎さまおはなしなされた、あしにきんのふだのついたつるがあるによつて、かりうどにてもなににても、これをとつたものは、さかさばつつけとのこと。おそろしいことじやないかいの。」
(海女) 「さればいな、それはかりうどのこと。こちとらが身のうへには、かまひのない事さ。」

〔注釈〕

◇かづき——魚を突いて捕える漁具。金突かなつまとも。「宇治川を下りける舟の、金突と申す物をもて、鯉の下るを突きけるを見て宇治川の早瀬落ち舞ふ漁舟のかづきにちがふ鯉のむらまけ」(『山家集』下)

◇きんのふだ——『奥州』(第二、口「外が浜の段」)では、代官の鶉の目鷹右衛門が現れ、漁師海女を前にして金の札のこたとを告知する。「さすれば右の神鳥、何国の浦山におりたりとも必ず鹿略致さぬ様との御上意なり。」

◇さかさばつつけ 逆さ磔。「はつつけ」は「はりつけ」の促音。「はつつけよばりて出やしたと女房」(『諧風柳多留』二十二篇・天明八)

《六丁裏七丁表》

〔翻刻〕

うとう文治は、一子清どうじとて、る人たけひらの一子をあづかりおきけるに、きさらぎのまへつころよりやまひにおかされ、りやうじはいろくををつくすといへども、文治ひんきゆうゆへこころにまかせず、いろくとせしかどもせんかたなく、日なしかしのなん兵衛がかたよりぎん六十匁かりけるに、はや日ぎりもきれたりと、とちうにてさいそくになんぎしているところへ、女ほうおたに、くすりとりにゆきしもどりがけ。

（お谷）「まあくおまちなされて下さりませ。」と、「此ほうにじよさいはなけれども、きよどうがわづらふゆへ。」

（南兵衛）「やあかましい。いつでもくおなじいひわけ。そのかねのかはりに、われをつれていく。」と、むりに引立ゆく。やうくおたにはふりきり、うちへにげかへりける。なん兵衛はあとをしたふて、おふてゆく。

おりふし、金のふだのつきたるつる、とびきたりければ、文治きつとみて、やがてゆみとやとつてひやうどいる。あやまたずいておとす。金の札ひつちぎり、いつさんにこそかへりける。「まづこれをしめれば、わうごん十兩はこつちのものだ。あめのもちに、さとふつけてくふやうなしうちじや。うまいく。」

〔注釈〕

◇うとう文治——お谷の亭主、善知鳥文治安方は、『奥州』では、実は安倍頼時家臣の鳥海前司安秀の一子文治安方。外が浜で獵師をしている。『奥州』には、奥州にちなんだ二つの謡曲、『善知鳥』と『黒塚』が取り入れられているが、前者の素材となっている「うとうやすたかの鳥」の説話による命名。

◇一子清どうじとて、る人たけひらの一子をあづかり——文治とお谷の間の子として育てられている清童は、『奥州』では安倍貞任の子という設定。それを本書は、清原武衡の子という設定に改めている（七丁裏八丁表の注釈参照）。『奥州』では、清童の病気は人參でなければ治らぬと医者から言われており、二人は貧しさの中で困窮している。「行末は、陸奥の内にはあれど外が浜、国の果とて荒磯に、狩漁を業として、世を押渡る一村の、中にも善知鳥安方とて、野山を家と狩りあるく。内は女房のしはたらと、子の煩ひに打ちかゝり、外には何も煎じやう常の如くに欠土瓶、折焼く柴のくすぼりに、しんきをもやすかせ世帯。」（第二、中）なお、清童の名は、厨川柵の合戦で死んだ貞任の子「千代童子」、および謡曲『善知鳥』に登場する漁師の子「千代童」によるものか。

◇日なしかし——日済貸（ひなしがし）は、高利貸の一種。

『守貞漫稿』第七編貨幣「日なし貸と云あり譬は今日元金一兩を貸す此錢大略六貫五百文也翌日より六十五日の間毎日錢百文を還す日々になししかへす故に日なしかしと云蓋息は始に除之

金一兩の證文にて二朱の息を除き其実三分二朱を貸す也此息大略元金二兩月息金一分より僅に賤息に当る蓋元金の多寡息の貴賤還法の日数等種々あれども大概准之」

◇なん兵衛 外が浜の高利貸南兵衛。「獵師町で口利く車銭の南兵衛」（『奥州』第二、口）

◇やう／＼おたにはふりきり、うちへにげかへりける——『奥州』では、まず海女同士の雑談の中で金の札の話題が話され、その後で、お谷に横恋慕する長太が登場する。からまれてお谷は迷惑するが、代官の登場で一旦は救われる。その後、お谷が、借金（の形として南兵衛に連れ去られるところへ、再び長太が現れて争いとなり、その間にお谷が逃げる。前丁同様、長太の登場が省かれ、筋が簡略化されている。

◇おりふし、金のふだのつきたるつる、とびきたりければ——この部分は、『奥州』では以下のように記され、かなり趣が異なっている。「まだ入相も遠浅の、洲さきにあさる鶴の声、窺ひ近寄る蓑と笠、辺を見回し手許を堅め、切つて放せば拳に手ごたへさしつたりと駆寄つて、脛根に着いたる金の札ふつと捻切り押戴き、駆け出す四方を五六人、ソレ鶴殺しの曲者、遁すな括れと取巻く磯部に幸ひの、舟へひらりと飛乗る早速。陸には術も荒磯の浪を、押切り／＼て行方しらず。」（第二、口）

※善知鳥文治の装束は、『奥州』の次の詞章によるもの。「山より山に獵りくらす、海部刀の刃を渡る、腰に半弓山衣装」（第二、口）

《七丁裏八丁表》

〔翻刻〕

なん兵衛は文治がかたへきたりければ、（文治）「こいつ、さきほどのかねさいそくにうせたり。」と、ふうふいかどせんとあんじけるときに、（南兵衛）「いかに文治そのほうはしるまじ、われこそは、おうしうのじう人、あべのそん、きよわらのいへひら也。何とぞして八まん太郎を一たちうらみんと心をくたく所、せんこく、なんぢつるをころせしこそよきてがら。われをそ人して、『南兵衛こそつるころし』とて引つれなば、八まん太郎のまへにいて、なわ引ちぎつて、ねんらいのうつぶんをさんぜん。なんぢは、ほうびの金にて、きよとうじがにんじんでも、かふてのますべし。」

文治がそ人にて、文治がいへをおつとりまき、（捕り手）「つるころしのなん兵衛、このやにかくれるよし、そ人あつてたしかにきく。めしとりにむかふたり」と、こうじやうによばわれば、南兵衛とんでいで、とりでを二三人とつてなげ、どつかとざし、（南兵衛）「さあ、ぜひにおよばぬ。そ人あつてからめとらるゝ、これまでのうんめい。さあ、よつてなわかけられよ。」と、なわかゝりひかれゆく。

（捕り手）「とつたぐ。しめたぞぐ。つるをころしたかはりに、つるりとしぼつてのけた。」

〔注釈〕

◇うせたり——来た、を卑しめていう語。来やがった。

◇あべのそん、きよわらのいへひら——奥六郡を領した安倍氏の孫、清原家衡。南兵衛が家衡であるというこの設定は『奥州』と異なっている。『奥州』では、南兵衛は実は安倍宗任という設定。「ヲ、不審尤も。合戦の初まではまだ部屋住の其方、我が面体を見知らぬは理至極、鳥海の城郭にて人となりし、安倍の三郎宗任」(二段、切)

安倍氏と出羽の清原氏とは、元來親密な交渉があったようだが、安倍氏が陸奥の土着系の豪族であったのに対し、清原氏は中央貴族系の豪族であったと思われ、家系は異なる。そして、前九年の役では、清原氏は源氏とともに安倍氏を倒している。ただし、『奥州後三年記』によれば、清原家衡の母親は安倍頼時の娘で、かつては安倍の武將藤原経清の妻であったが、前九年の役の後、清原武貞に嫁いだ女性であるという。その意味では、家衡は安倍頼時の孫ということが出来る。

ちなみに、武貞の先妻の子が真衡であり、経清の妻とともに清原氏となった子(経清の子)が清衡、嫁いだ後に武貞との間に生まれた子が家衡である。この兄弟間の内紛が後三年の役であり、家衡は、叔父清原武衡とともに、清衡を助けた源義家に討たれた。

※鶴を殺した文治に代わって、南兵衛が捕り手につかまる、というこの展開は『奥州』と同様。ただし、本書ではかなり単純

化されたものとなっている。『奥州』では、文治が、自ら鶴殺しを白状した訴状をお谷に持たせて役人へ遣り、押し掛けてきた捕り手の縄にかかる。自らを犠牲にし、褒賞の金を清童の葉代にあてようとしたことであったが、その騒ぎの中で清童は絶命し、文治夫婦は悲嘆にくれる。それにかまわず文治を連れ行こうとする役人の前に南兵衛が現れ、自分こそ真の鶴殺しの犯人と名乗り、その証拠として金の札を見せ、「科ない者を縛らずとも、縄といて某を、早く都へ引かれよ」と言う。とまどう文治に、南兵衛は「鶴殺しとなつて都へ引かれ、八幡太郎に見参せばそれこそ日頃の願成就。ナ、合点か」と言つて目で決意を知らせる。しかし、文治はその場で切腹しようとする。南兵衛に止どめられた文治は、「只今死せし伴と申すは我々夫婦が子にあらず。三代相思の御主人より預りし大事の和子。御大病の介抱も心に任せぬ身貧の某。此後主人のにめぐり逢はゞ何と言訳有るべきぞ」と、千代童子が安倍貞任の子であったことを告白する。南兵衛は役人に縄打たれ、文治夫婦は、主人の和子を失つた悲しみにくれる。

善知鳥は却つて生残り、我は擱おととなつたるも敵を欺く氣の大鳥。追おっ付け天下に羽うつ鳥、数々鳥の報いを爰に、陸奥の外が浜なる善知鳥の宮、安方町と名も高き古跡は、今に残りける

と、『奥州』第二は結びとなる。

《八丁裏九丁表》

〔翻刻〕

かくてけんじやうなおかた、たまきのみやの御ゆくへ、しらぬつくしのほどゞぎす。なつきりふゆのかれはつる、にはのこぼくもしろたへの、ゆきふみわけてよしいへ公、御みまいのため入きたり給ひ、(義家)「なをかた公にはさぞ御くろう。しれさせ給はねば、しうととてやうしやはならぬ。このこと申さんため、よしいへ参りたり。」

(直方)「これはむこどののあふせ、御もつとものこと。なるほど、せうちつかまつる。」

かゝる所へ「かつら中納言のりうち御入」とあないにしたがい、のりうじ公、はくばい一系だてにもちて、(教氏)「この一おり、まだふゆごもりながらしん上申。」

(直方)「いかにもこのしらむめを御ぢさんのやう、せうちつかまつる。しろきは源じ、われは平け、此しらむめをもつて、はらきれとのことならん。」と、しづくとはだおしくつるげ、「みやのかしづきにてみやをばいとられし申わけ、たゞ今けんじやうなをかた、せつふくつかまつる。よろしくそうもんいたされよ。」と、九寸五分をはらにつきたて、ひきまはず。はまゆふ、わつとはかりにふししづむ。

(直方)「しきたへかこと、おたのみ申。よしいへどの、みやのせんき、よきにはからいくれられよ。ぶしやうのやくとはいひなから、おたのみ申。」とばかりにて、あさひにあへるしら

ゆきと、きへてはかなくなり給ふ。

〔直方〕「エム、くちおしや。みやのゆくゑも、ぜんぎもとげず、ひとへによしいへどのゝおなさけたのみます。」

〔注釈〕

◇かくてけんじやうなおかた、たまきのみやの御ゆくへ、しらぬつくしのはとゞぎす。——このあたりの記述は、『奥州』の第三・中の冒頭の詞章をふまえている。「平憊仗直方、環の宮の御行方知らぬ筑紫のほとゞぎす。夏去り冬のいつしかに、既に今年の日も数も、春待つばかり枯残り、枯果つる庭の檜皮ぶき、落葉の軒と葺変へて。」

◇よしいへ公、御みまいのため入きたり給ひ——『奥州』では、義家の前に、直方の義家に嫁した妹娘敷妙がまず訪れ、環の宮の行方の詮議の期限が今日一日を残すのみとなったことを告げ、婿舅の間であっても容赦はできない、という義家の立場を伝える（一丁裏二丁表の注釈参照）。その後、義家が現れ、直方は拾った証拠の書状（一丁表注釈参照）を見せたので、二人は安倍貞宗・任宗の仕業との確信を強める、という展開になっている。

◇九寸五分——切腹の際に用いる、九寸五分の長さの短刀。

「奥より長門之助、白無垢水上下にて出、三宝に九寸五分を戴せ持出る。」（並木五瓶『韓人漢文手管始』寛政元年）

◇はまゆふ——浜夕。直方の妻の名。

※中納言教氏が勅使として現れ、持参した白梅の枝で切腹を勧め、それに深く直方が従う、という大筋は『奥州』と同じ。ただし、『奥州』での、奥州から送られて来た鶴殺しの科人を、肩口の二つの痣から義家が宗任と見破る部分や、宗任と貞任（教氏）との白梅の和歌のやりとり等が省かれて、簡略化されている。

※教氏・文治・義家らの顔は、特徴的に描かれているようにも思える。あまり写実的ではないが、清経が役者の似顔絵を用いた例はある。図一は、清経が安永六年『甲子待座鋪狂言』（岩瀬文庫蔵）に描いた初代中村仲蔵、図二も同書に見られる二代目嵐三五郎の似顔絵であるが、本書の教氏・義家と比べてどうだろうか。参考までに、p.29に宝暦から安永にかけての歌舞伎での上演の際の配役の一部を示したが、実際の歌舞伎の上演とは無関係に描かれている可能性も考えられよう。

図一

図二

《九丁裏十丁表》

〔翻刻〕

よしいへ公は、つるころし南兵衛こそいへひらなり、とみあらわし給ひ、なわをといて、(義家)「たがいのうんは、せんじやうにてけつすべし。」とてゆるし給ふ。

けんじやうなをかたのむすめ、おそでは、たけひらといひかはし、いへでしていまはふうふのゑんもきれ、一人のむすめおきみとともに、ひにんとなつてさまよひけれども、ちゝなをかた、なんぎのことあるよしきゝおよび、心もとなくきたりて、やうすをきかんとせしに、かんとうのむすめ、ことにかたきたけひらが女ぼうなれば、「たいめんかなわぬ。」とておい出しければ、せんかたなくわがみをくひて、くわいけんのんどにつきたて、むなしくなる。

(お袖)「ありかたふぞんじます。このうへもなき御かうおん、おたのみ申ます。われもかやうの身にならずは、いもにもあい、めいよおばよといわれんもの。はゝはこれまで、さらばやゝ。」と、そのまゝいきはたへにける。

むすめおきみは、はゝのじがいをかなしみなげきけるを、よしいへみ給ひ、(義家)「ちゝたけひらとゑんきれたれば、おきみは、わがやしないそだつべし。こゝろやすかれ、おそで。」とて、つれてきくわんなし給ふ。

(南兵衛)「あつはれ、ぶゆふのめいくんかな。おそろしいが、なりきかな。なさけある大しやうじやなあ。」

〔注釈〕

◇つるころし南兵衛こそいへひら——『奥州』では、南兵衛実
は安倍宗任。

◇たがいのうんはせんじやうにてけつすべし——『奥州』での、
義家が宗任を逃がす際の言葉は、以下の通り。「網に洩れたる
鱗を助けるは天の道。鳥類の命さへ重んずる我が心。況やあつ
たらしき勇士。命を助けソレ其札。康平五年、源義家これを放
つと書記せば、此上もなき閑所の手形。肩口の痣は切裂いても、
武将の息のかゝつた汝。繋ぎし犬も同然日本国中を放飼、何国
なりとも勝手に行け。」（第三、切）

尚、互いの運は戦場で、といった内容の義家の言葉は、第三・
切の最後で、貞任にたいして発せられている。

◇けんじやうなをかたのむすめ、おそでは——「おそで」は
『奥州』の袖萩にあたる。直方の姉娘袖萩は、ある浪人と密通
して父に勘当されるが、その浪人は実は貞任であった。今は盲
目の乞食となって、娘お君とともに七条朱雀堤にいたが、親の
大事を知って訪ねて来たものの、直方は会おうとしない。「袖
萩祭文」として、『奥州』の中でも最も有名な場面。雪の中に
残された袖萩は、宗任から懐剣を渡され、直方を殺せと命じら
れるが、父の切腹を知って、自らも懐剣で胸を刺して死ぬ。

◇むすめおきみ——お袖と武衡（『奥州』では袖萩と貞任）の
間に生まれた娘、お君。

※『奥州安達原』宝暦十二年九月竹本座興行の番附
（日本名著全集『浄瑠璃名作集』より転載）

《十丁裏》

〔翻刻〕

かつら中納言のりうちとなりの、しまよりきたり給ふと、これこそたけひらよ、とにらんでおいたり。

(家衡)「よくもみとがめ給ふものかな。あつはれめいしやう、たがいのうんは、せんじやうく。」

てうてきたけひら・いへひらいけどつて、めんはくさせんといふは、おもてむき、そのせうぞくをそのまゝに、(義家)「かつら中納言のりうち公、御くろうにそんする。」

〔注釈〕

◇これこそたけひらよ、とにらんでおいたり——『奥州』では、教氏は、清原武衡ではなく、安倍貞任。「貞任無念の牙を嚙、逆立つ髪は冠を貫き、怒りの大息ほつとつき、エム口惜しやなあ。我一旦浪人となつて、都の様子を窺ひしが、官位なくては大内へ入込まれずと、流人赦免の折を幸ひ、誠の教氏は先達て病死せしを、我なりと偽つて・・・」(第三、切)

◇めんはく——面縛。両手を後手にして縛り上げ、顔を前方に差し出すようにすること。「天罰脱れがたきをしらば、面縛して刃を受けよ。」(『椿説弓張月』拾遺卷之五・文化七年)

◇たがいのうんは、せんじやうく——「命存へ時節を待つて、戦場の勝負はなせぬぞ。今犬死して親頼時の大望は無にするか」(第三、切)

《十一丁表》

〔翻刻〕

いこまの介・こひぎぬは、きみのなさけのかんどううけ、ぎよけんとみやのおゆくゑをせんぎしだし、御かんき御めんをかうむらんと、おうしうさしていそぎゆく。

はやひもにし山におもむきて、ゆくさきとをきたびつかれ、はるかにみやる一つやに、たどりついて一ちやをあかさんと、ふうふもろともいそぎゆく。

〔注釈〕

※『奥州』第四、「道行千里の岩田帯」による。ただし、本来は、生駒之助と恋絹は葉売りに身をやつしての旅であるが、ここではそのような趣向が取られていない。「傾城の、積は誠の置所、世界の客へそら言も、一人に尽す真実の、恋の中なる恋絹が、寝姿恥ぢぬ中となる。其こしかたの通ひ路は、花車のかげ橋渡り初、生駒の手綱せきとむる、くつわの関を、打越えて今は女夫の葉売、草鞋に隠す八文字、駕昇頼まぬ日傘さして行くへは陸奥の国」

《十二丁裏十二丁表》

〔翻刻〕

寒林かんりん 骨打はねうち 靈鬼れいき 深野ふかの 花供はなぐ 天人てんじん 風漂かぜやうぼう 危あやうたるあだちがはら。

りんかもなき一つやの、つたはさかだちうろこのごとくのあばらやに、すみなれたるらうちよありける。おりふしたそがれに、たび人一人、「ちとたばこの火。」と入りきたる。

(老女) 「こちへはいつてやすましやい。」といへば、たび人、「いやこのみちは、ことのほかぶつそう。一やをあかさせたまわれかし。」

(老女) 「やすき事、とまりたまへ。このあばらや、もしどろぼうでもこまいものでもない。そのくびにかけてあるろぎん、こつちへあつけておき給へ。」

(旅人) 「いやこれは。」といふまもなくひつとらへて、くわいけんぬぎ、かたさきへぐすとさす。あつといふまにうできりおとし、さいふとれどもはなさねば、うでともににおごけへ入、しがいをゑんの下へおしこみ、さあらぬていにて、うみさしのをゝかみてこそあたりける。

(旅人) 「こいつ、ふといどろぼうめだ。」

(老女) 「はやくくたばれ〜。」

(旅人) 「エ、くちおしい、人ころしく〜。」

おりふし、たそがれすぐるころ、いこまの介・こひぎぬは、や

う／＼一ツやにたどりつき、おやどの御むしんといひければ、(老女)「あゝ、こちへはいらしやれ。」と、「さやうならば。」とうちに入。おりわるくこひぎぬは、つかへさしこみなやむにぞ、らうちよは、「このさきのしゆくによきくすりあれば、かうてきてしんせさしやい。わしがみちをあんないしてしんせう。」と、いこまは、「さやうならば。」とて、らうちよもろともくすりをかいにいそぎゆく。らうちよはたちかへり、「これ／＼、ちよちう、あのせうしのうちをかならずみまいぞ、かまへてあけて下さるな。」いひすてゝこそいでゝゆく。

こひぎぬはきみわるく、「このあばらやにたゞひとり、ことに一まをみるなといふたもこゝろへず。」とそつとのぞけは、しやりこへのあるにびつくり、たちのくひやうしにおごけをふみかへしければ、うでとともにかねざいふ。いるにもいれぬおりからに、あるじのばどはたちかへり。

〔注釈〕

◇寒林骨打霊鬼——『奥州』第四、中の冒頭による。以下、同様の記述が続く。「寒林に骨を打つ霊鬼。深野に花を供する天人。風飄茫たる安達が原。隣の家なき一つ家の、軒の柱はすね木の松、己が気儘にまとはるゝ葛は逆立つ鱗の如く・・・」

◇あだちがはら——安達原。安達太良山東麓の古来よりの陸奥の歌枕。『奥州』には、謡曲『黒塚(安達原)』等の安達原の鬼女伝説が巧みに取り入れられている。

◇おごけ——苧桶。積んだ麻を入れておくための、檜のへぎ板で作った桶。「しぶといまだ財布放しをらぬ。アア儘よ、腕ぐち取つて置かうと、苧桶の底へ取納め。」(『奥州』第四、中) 謡曲『黒塚』に、老女が麻の糸を紡ぐ場面があるのをふまえたものであろう。

◇うみさしのをゝかみて——積みさしの苧を噛みて。苧を細く裂いて寄り合わせて、長い糸にする途中のものをくわえている姿を指す。何事もなかつたように、糸を紡ぎ取る作業が続ける様子。

◇おりわるくこひぎぬはつかへさして——『奥州』では、これに当たる場面で、恋絹の妊娠が明記されているが、本書にはない。これは、微細ながら、老女が求めているのは胎児であったとする『奥州』との設定の違いに関連する(二十二丁裏十三丁表注釈参照)。「落着ける主、気のせく生駒、イエ／＼／＼、そんな事ぢやござりませぬ。何を隠さう女房は此月が臨月でござります。大方其気が付いたもの。ヤア何ぢや。此月が産月ぢや。アノ此女中が。ハテ扱それはと心の工面。」(第四、中)

※十一裏・十二表ともに、『奥州』第四の中の展開をほぼ忠実にふまえたものとなっている。老女が旅人を殺して金品を奪うのは「皆軍用の助けの為」、という説明が『奥州』ではなされておき、この老女は、生駒之助を方向のわからぬ山中に一人置き去りにし、迷っている間に一つ家に戻って来る、という展開になっている。

《十二丁裏十三丁表》

〔翻刻〕

(老女) 「これちよちう、みればなにやらうろく、なにしやるぞ。これ、ちよちう、そなたにむしんがある。」

(恋絹) 「なんでござります。」

(老女) 「そなたのみについたものがほしい。もらわふわへ。」

(恋絹) 「あゝいや、かねはぬしがついていかれたれば。」

(老女) 「こゝにはいないといふことか。いや、かねはいらぬ。はたちより三十までのあいだの、女ごのいきどもが入やうだ。そのいきどもがほしいはへ。」

(恋絹) 「ゑいそれは。」

(老女) 「それはとはいわさぬ。」と、とつておつふせむまのりにのつかより、むないたへつゝこむ九寸五分。あつと一こへさげぶうち、むねたちわつててをさしいれて、きもをひきだしつほに入、まもりぶくろをひつさらへ、おくのまさして入にける。

(恋絹) 「アゝくるしい〜。ぬしのかほが一とめみてしにたい。かたきをとつて〜。」

ひとまへはいり、まもりぶくろをひらき、かねてもあるやとてさがしみれば、かきつけあり。ひらきみれば、(老女) 「こはいかに、おうしうのじうにん、あべのさだとうがむすめ、あさきぬとあり。さては、わかむすめか。ふびんなさいこをとげ

させしそ。げんざいわがむすめをてにかけてころすといふは、あまたの人をころせしむくひか。さるにても、かのおかたのおしをなをして、おうしうの天りをたて、八まん太郎をほろぼさせん。むすめがいききもも、ぐんぢんのちまつり。」と、いさみくゝて入にける。

〔注釈〕

◇はたちより三十までのあいだの、女ごのいきどもが入やうだ——生き胆の趣向としては、浄瑠璃『撰州合邦辻』（安永二年）の趣向がよく知られており、草双紙にしばしば取り入れられている。俊徳丸の病を治すのに、寅の年寅の月寅の日寅の刻生まれの女の生き胆の血が必要というのだが、それに影響されたものか。『奥州』では、胎児を得て薬にすることが目的。「イヤ産んだ子は役に立たぬ。まだ腹にある中を、子籠というて大銀になる大妙薬。それで其子が貰ひたい。」（第四、中）

尚、伊原青々園は、馬琴の『椿説弓張月』においての、阿公という老婆が孕み女の腹を裂くという展開は、この『奥州』の老女を作り替えたものであるとし、「謡曲から浄瑠璃、浄瑠璃から歌舞伎劇、そうしてそれが更に小説に脱化せられて、その小説が再び歌舞伎劇で演ぜられたという」徳川文学の因果を説明する上での好例であると述べている。（「棧敷から書齋へ」大正十三年）

◇まもりぶくろをひらき、かねてもあるやとてさがしみれば、

かきつけあり——『奥州』では、血汐が時頼の鬪體にしみ込んだことから、恋絹が老女の実の娘であったことが知れ、その後で守り袋を見る。「始終を聞いて驚く生駒、ムゝ貞任の母儀とあるからは、手につけられし女が為にも。ホゝ、則ち母といふ事か。サア、然らば娘と存じの上。イヤ知らぬ。娘と知つたはたつた今。無念の最後をとげられし。夫時頼の魂魄をいまずが如く此日頃、祭り置きたる鬪體に、女の血汐しみ込みしは、親子の血筋疑ひなしと、捜し見れば此守りに、吾が家の系図書。扱こそ知つたる娘が身の上。往時の敗軍に親子兄弟ちりくゝになりし時、乳母に抱かれ別れし後は、都九条へ売られしと聞きつれど。」（第四、中）しかし、守り袋を見て我が子と知るといふ場面を見せ場とする演出も、早くからあったようで、『義多百鼻貞』（浄瑠璃評判記・安永六年）にも「夫より次に黒塚一ツ家の段恋衣をころし守り袋を見我子と知り」とある。

◇あさきぬ——『奥州』にはこの名はない。

◇げんざいわがむすめをてにかけてころすといふは、あまたの人をころせしむくひか——これに当たる老女の言葉は『奥州』にはない。犯した罪を悔いる気持ちはなく、「思はず知らず我が娘が君の病の薬となるは、手柄者とも果報とも、此上のあるべきか。」と、「実にも貞任宗任を産落したる骨柄」と思わせる不敵な態度を見せている。

《十三丁裏十四丁表》

〔翻刻〕

いこまの介は、立かへりみれば、女ほうはあけにそみ、「なむ三ほう、ばどめにだまされしがさんねんや。いでかたきとらん。」とて、一まのせうじけやぶつてとびこむ。むかふはしゆぎよくをのべたる御てんある。みすまきあげて、おきなみや、そはにらうちよはつきしたかい、いこまの介もすゝみかね、しばしためらいあたりける。

（生駒）「ばどあめ、つまのかたきかくごしろ。」とはつたとにらめば、らうちよはこへかけ、「かたじけなくも、とうぎんのおくとみや、たまきのみやのぎよくざまちかくひろう也。かくいふわれは、おうしうのつかさ、あべの太夫さだとうがつまいわせなるが、なさけなくもわかおつと、八まん太郎にほろほされ、むねんの月日をおくりしうち、せいてうしたるたけひら・いへひら、たまきのみやをばいとりしは、おうしうのだいらとして八まん太郎をほろほさんため。されとも、みやおしにてわたらせ給へば、廿より三十迄のあいだの女のいきどもをとり、めうやくにもちたてまつらんと、ころしてみればわがむすめ。」きいておどろくいこまの介。

くしけのないしは、かのいきどもとつてたにそこへなげすて給へば、水まき上てとつかのぎよけんれいろうとあがらせ給へば、いこまの介「さてこそく、この二しなさへいでさせ給へば、わがきみへ申上ん。」といさめば、くしげのつほね、「わ

れこそ、まことはよしいへのおくと、しんら三郎よしみつ也。

このたまきのみやも、いつわり也。われたけにそだちしゆへ、かほをもしらぬこそさいはい、かくははからい申たり。この二しなをとりゑては、あにゝかはりて、いこまかんとゆるす。」

〔注釈〕

◇一まのせうじけやぶつてとびこむ——このあたりの記述は、『奥州』をほぼ踏襲したもとなつてゐる。「主が聞とおぼしき一間いへまの戸襖踏開けは、内は珠玉をのべたる御殿。翠簾みずかき上げたをやかに打臥し給ふ稚宮。」(第四、中)

◇ばゞあめ、つまのかたきかくごしろ。——『奥州』「ヤア体に綾羅は纏へども禽獸に等しき狸婆々。妻の敵子の敵覚えがあらう。覚悟せよ。」

◇かくいふわれは、おうしうのつかさ、あべの太夫さだとうがつまいわせなるが——『奥州』と本書で設定の異なるところ。

『奥州』では、「奥州六郡の司安倍太夫頼時が妻」であり、名は「岩手」。頼時は貞任・宗任の父親。

◇みやおしにてわたらせ給へば、廿より三十迄のあいだの女のいきゞもをとり、めうやくにもちたてまつらん——『奥州』では、口のきけない環の宮を直すため、胎児を棄に用いようとする設定だが、その理由を老女は次のように説明する。「昔漢の代に或一此病を煩ふ。名付けて止声病といふ。其頃耆婆が秘密の家方。孕める女の腹を裁ち、胎内の児の血汐を用ひて立所に

平癒す。」

◇しんら三郎よしみつ——源頼義の第三子、新羅三郎義光(一〇四五一—一二七)。弓馬の術にすぐれ、笥の名手としても知られる。後三年の役では、苦戦する兄義家のもとへ、左兵衛尉の官を辞して駆け付けたという。九つの時、頼義の見た、「向後、又義家が輔佐と成るべき者は、今幼稚の三郎なり。彼を以て我に託せば、鎮に彼が武勇を護持すべし。我は新羅明神なり」という夢の告げに従つて、新羅明神の氏族となり、神前で元服して新羅三郎を名乗つたという(『前太平記』)。

◇このたまきのみやもいつわり也——『奥州』では、環の宮は、実は「義家一子八若」であつたという設定。声が出ないのも演技であつた。

※『奥州』第四、中「一つ家の段」では、この後、岩手が口惜しきから、死出の道連れにと生駒之助と組み合うが、背後の襖を踏み開けて鎌倉権五郎景政が登場し、岩手に降参を迫る。覚悟を決めた岩手は、剣を口に加えて谷底に身を投げる。谷底の宝剣を求めて新羅三郎が谷底へ向かうと、敵の隠し勢が現れる。続く切「谷底の段」では、岩陰から貞任が現れ、宝剣を返して、「只今渡すは宗任が命の返礼、再会は戦場と義家に伝えよ。」と言ひ、後日の戦いを約束して両者が別れる。

《十四丁裏十五丁表》

〔翻刻〕

かくて一せんにおよびければ、八まん太郎よしへ公、一せんにうちかち給ひ、たのみにおもふとりのうみ弥三郎もうちに、うとう文治もうたれければ、たけひらも、かまくらの権五郎かけまさうたれける。いへひらは、いこまの介にいけどられける。たけひら、さいごに申せしは、「かほどのめいしやうといひ、ことになさけうけしたいせうなれば、なにとぞおとゝのいへひらを、御けらいともなしくださらば、しやうくせゝの御かうをん、たのみたてまつる。よろしくごん上下されよ、かけまさどの。」

(家衡) 「なにとぞ御けらいに、なし下されかし。」

(兵) 「けらいにしてくれろとは、これは、きみのわるいはらだ。」

(生駒) 「どっこい、しめたぞ。」

〔注釈〕

◇かくて一せんにおよびければ——『奥州』では、第五「小松が柵の段」に相応するところ。小松の柵は前九年の役での主戦場の一つ。本書は、前九年の役の世界である『奥州』の設定を改め、武衡・家衡を登場させて後三年の役に設定を改めているため、この名称を用いていない。後三年の役での最後の戦いとなつたのは金沢柵。

尚、金沢柵の戦では、義家は「剛臆の座」を設け、毎日の戦鬪の結果によって、兵をそれぞれの座につかせたという。義光の郎等藤原季方のように、一度も臆の座につかなかった者もいたが、逆にとりわけ臆病な者も五名おり、その名前が『奥州後三年記』には次のように記されている。「籙の音きかじと耳をふさぐ剛のもの、紀七、高七、宮藤王、腰瀧口、末四郎。末四郎といふは末割四郎惟弘が事なり。」『奥州』に登場する悪役瓜割四郎はこの末割四郎をもじったものであろう。

◇とりのうみ弥三郎——鳥海弥三郎。後三年の役の清原方の武将。「武衡が一二と憑たもみし兵に、奥州の住人鳥海弥三郎と云ふ者あり。強弓の手足なりしが」（『前太平記』卷三五）

◇かまくらの権五郎かげまさ——後三年の役の源氏方の武将。鳥海弥三郎に右目を矢で射られつつも、弥三郎の首を取った剛勇で知られる。「普通の者なりせば、此矢を受けて、片時も命生くべくも見へざりしが、景正些とも弱らず、片目にて敵を見留どめ、唯今御矢賜りしは、鳥海弥三郎殿とこそ覚へたれ。其処引き給ふな。当の矢を進らせん。受けてみ給へと云ふ儘に、眼に矢を折り懸けながら、弓矢番がふて引き絞る。」（『前太平記』卷三五）

◇おとりのいへひらを、御けらいともなしくださらば——『奥州』第五の貞任の最後の言葉に対応。「大将の前にとつかと坐り、三十年來父の敵討たうと思ふ鐵石心。義家公の御恵みに忽ちとろけし此上は、弟宗任を御家來となし下さらば、生前死後

の面目と、苦しき中にも弟を思ふ真実、親身の血の涙。大将不便と思召し、いかに宗任、心を改め我が幕下に従ひ、安倍の家を引きせと、恵みも厚き御詞。」

実際に安倍宗任は、厨川柵の合戦の後降伏し、それ以後も朝廷に従って長く生きたとも言われている。清原家衡は叔父武衡とともに寛治元年（一〇八七）に金沢柵で死んでいる。

◇しやうくせ——生々世々。永遠。永劫。

※『奥州』の設定が前九年の役であったのを改め、登場人物の一部を後三年の役に関連する人物に置き換えている点が、全体として原拠に忠実な本書の、最大のオリジナリティ。歌舞伎等の趣向の影響とも考えられるが、上演記録の配役を見る限りこのような例は見られない。歴史的な事実^に照応させるならば、前九年の役の時の鎮守府將軍は頼義であり、その子義家は一三、四歳であった。義家を鎮守府將軍とし、弟義光まで登場させるとなれば、本書のような設定の方が『奥州』よりも理にかなっている。この程度の時代考証は、『前太平記』等の通俗歴史書からも容易に得られたはずである。微細ではあるが、あえて「戯作」として名を記した作者の意識を考える場合、対象となるのは、随所に見られる当世風の言い回しのはかは、この設定についてのこだわりのみであろう。

《十五丁裏》

〔翻刻〕

よしいへ公、一せんにうちかち給ひて、たけひらかくびしつ
けんましく、かのいひおきたるおもむきを、権五郎かげまさ
申上ければ、いへひらことは身ぢかくめしつかいゑさせんとて、
御きんじゆにぞなし給ふ。奥州ちんじゆふのしやうぐん、源の
よしいへと、まつ世に名高き名せうなり。

戯作 米山鼎峨述 鳥居清経画

〔注釈〕

◇米山鼎我——写真版では「米山」が確認できないが、原本に
は明らかに「米山鼎峨」とある。

鼎峨は生没年未詳。『増補青本年表』には、「米山鼎我 米山
氏文溪堂と号し、筆耕を業とす、鼎我を作名とせり。」とある。
『国書総目録』には一八作の書名が載るが、その大半は鳥居清経
画の草双紙である。同書によれば、その著作の刊年の明らか
なものは、安永四年から天明四年にかけてであるが、鈴木俊幸氏
は、明和三年刊の長唄本『常磐友』の刊記に「書写 竹酔堂鼎峨」
とあることを指摘。棚橋正博氏によれば、明和三年刊と思われ
る黒本を著しており、明和年間から安永年間かけて、筆耕を業
としつつ、草双紙の他に洒落本・噺本を著し、江戸切絵図も描
いたという。洒落本『女鬼産』(安永八年)の刊記により、江戸高
砂町に住んでいたと考えられている。

(うどう ゆたか)